ラガー（Lager）

―― ナチス「キャンプと隊列の教育」の展開 ――

小　峰　総 一 郎

目　　次

一，緒　　言
二，アンドレアス・クラース：「ドイツ人というものを彼の親密な生活空間の中で体得する――教育形態としてのラガー」 大要
　1．序論
　2．研究状況並びに考察方法
　3．ナチス教育ラガーの目標と自己理解
　4．ラガー教育の諸機関
　5．ナチスラガー実践とラガー体験
　6．まとめ
［付録］ ラガー諸形式一覧
三，結　　語
四，文　　献

教員ラガーにて（Kraas（2004）, S. 265.）

ヒトラーユーゲントのキャンプファイヤー（コッホ，p. 57.）

一，緒　　言

ナチス第三帝国（1933-1945）時代の教育はどのようなものだったのだろう。

私はこの間，ナチス時代ライン地方のギムナジウム教育を紹介，研究する中で，一方で「ナチス教育学」自体の生成は困難であったこと，しかし他方で，ナチスの教育は「学校」の教養主義

的知識伝達教育を否定し，＜社会＞全体での教育，すなわち身体・心情・ナチズム志操形成を核とする擬似軍隊的な錬成の教育＝**「キャンプと隊列（„Lager und Kolonne“）の教育」**をこれに代置し，押し広げたと仮説的に述べた[1]。

それを象徴するのが，例えば**「民族政治科実習（Nationalpolitische Lehrgänge）」**である。それは，中等学校上級生徒（男女）が通常の学校を離れ，学校田園寮（Schullandheim）ないしユースホステルで２週間にわたって展開する現地宿泊実習であった。学校の枠を超えた生徒集団は，まずもって，国境地帯の学校田園寮で民族的課題を自覚しながら，スポーツ・祝祭・ナチズム思想学習・郷土学習を展開する；実習を主導するのは，ペダンチックな学問者教師でなくヒトラーユーゲントであった。寝食を共にする生活協同体は仮想の民族共同体と理解され，彼らはやがて，ここでの錬成教育を基礎に民族と祖国に自己投企するナチスト青年となって行くのである。民族政治科実習は，ナチス「キャンプと隊列の教育」の原型となったのである。だが，民族政治科実習はあくまで「学校」枠内の教育活動と捉える帝国教育大臣ルストと，ヒトラーユーゲントおよびナチス教員連盟との対立は先鋭化し，やがて，青年運動一元化の中で「禁止」を余儀なくされるのである（1936. 12. 3）[2]。

だが，「キャンプと隊列の教育」は民族政治科実習の中止で終わったのではない。否，むしろ「キャンプと隊列の教育」はナチス教育の精髄と理解され，これが中等学校にとどまらず，大学・初等教育・職業教育等の学校教育，大学教員も含む教員の再教育，職業集団での教育，法務専門職，医師・助産婦の職能教育等々と結合し，これら集団が，自覚的にナチス帝国に一元化統合する装置となって行ったのである。さらに一般の市民・労働者・青少年・婦人・女子もそれぞれのナチス団体に組み込まれ，団体が行なう**「ラガー教育」**は，成員をこの小民族共同体に強固に結びつけ，結果，彼らをドイツ民族＝ナチス第三帝国に統合したのである。（それは，戦前日本の「総力戦」体制下の国民統合を想起させるが，ナチ党（と総統ヒトラー，ナチス諸機関）に指導されるナチス第三帝国の国民統合と，軍部主導による日本の国民統合とは，形と内容を異にする[3]。）

さて，この小民族共同体を大民族共同体へと結合させる「ラガー教育」を研究対象とするユニークな歴史研究がドイツで現れた。**アンドレアス・クラース（Andreas Kraas, 1962– ）**の「教員ラガー」研究，およびラガー全般についての研究である。

1　小峰　総一郎「ライン地方のあるギムナジウム（３）」『中京大学国際教養学部論叢』第８巻第１号，2015/9.

2　Scholtz, Harald: Erziehung und Unterricht unterm Hakenkreuz. (Kleine Vandenhoeck-Reihe, 1512), Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1985, S. 50.

3　後述 三，結語 参照。

A．アンドレアス・クラース 『教員ラガー1932-1945――政治的機能と教育学的展開』（バート・ハイルブルン：クリンクハルト社，2004.

（Kraas, Andreas: Lehrerlager 1932–1945: politische Funktion und pädagogische Gestaltung. Bad Heilbrunn: J. Klinkhardt, 2004.）

B．アンドレアス・クラース：「ドイツ人というものを彼の親密な生活空間の中で体得する――教育形態としてのラガー」（クラウス-ペーター・ホルン／ヨルク-W・リンク（編）『ナチズムの中における教育諸関係』（バート・ハイルブルン：クリンクハルト社，2011），S. 294-318.

（Andreas Kraas: „Den deutschen Menschen in seinen inneren Lebensbezirken ergreifen − Das Lager als Erziehungsform, 2011.“ In: Klaus-Peter Horn/Jörg-W. Link (Hrsg.): Erziehungsverhältnisse im Nationalsozialismus. Bad Heilbrunn: Klinkhardt, 2011, S. 294–318.）

これは，今までのナチス教育研究では見えなかった要素を可視化した；

①すなわち一方でナチス団体（特にヒトラーユーゲント，突撃隊）の指導を通して小民族共同体を大民族共同体に組み入れて行く形式，装置，内容を解明する；

②他方，それとともに「ラガー教育」は，それら集団メンバーの心情・連帯感・同胞意識をこの小民族共同体と大民族共同体に強く結びつけ，党（ナチ党）と国家を「自分の集団」，自身と不可分の存在であると強固に＜自覚＞させるのである。

（ラガー（Lager）の訳語としては，冒頭に用いた「キャンプ」の語のほかに，「合宿」，「露営」等の表現が思い浮かぶが，以下に述べるように，Lager はそれらすべてを含みこむものとして使われているので，小論では原語のままの「ラガー」と表現する）

そこでは，旧来のナチス教育研究――すなわちナチス教育の機構や行政，制度，人物，思想，カリキュラムの研究――には捉え切れなかったものを掬い取ろうとしているのである（それらは敢えて言うならば，体験教育・体験要素，心情要素・身体要素・人格性，労働教育・田園教育・塾風教育，儀式教育――等々となるであろう）。私はさきに，中央教育研究所（Das Zentralinstitut für Erziehung und Unterricht zu Berlin）の後史に関するクラースの詳細な研究（「教員ラガー」Lehrerlager 研究）に打たれたことであった[4]。

---

4 ベルリン中央教育研究所（Das Zentralinstitut für Erziehung und Unterricht zu Berlin についてはベーメの研究が体系的である。Böhme, Günther: Das Zentralinstitut für Erziehung und Unterricht und seine Leiter: Zur Pädagogik zwischen Kaiserreich und Nationalsozialismus. Neuburgweier: G. Schindele, 1971. 私はかつて，ワイマール時代ベルリン新教育の中の同研究所を研究したことがある（小峰『ベルリン新教育の研究』（風間書房，2002，第 6 章）。そのとき依拠したものの一つがベーメの研究である。ただ残念ながら，この研究はナチス時代を扱っていない。本論でクラースが述べているように，ナチス教育に果たしたベルリン中央教育研究所の役割はきわめて重大だった（ナチス人種学教育，教員再教育ほか）。こ

そこで今回は，クラースがこの教員再教育を始めとする「ラガー教育」一般をナチズム教育の本質形態として分析した上記Ｂ.の内容を紹介してみることにする（一部割愛）。

二，アンドレアス・クラース：「ドイツ人というものを彼の親密な生活空間の中で体得する――教育形態としてのラガー」大要[5]

１．序論（S. 295–297）

- 統合化＝ラガー［Lager キャンプ，合宿］。積極像＝ナチズム。ナチズムイデオロギーの育成に。
- 非日常的自然の中で。町から孤立した空間。自然に近く，しかし外とは隔絶された空間。そこでは音楽・スポーツ，ゲレンデスポーツ，軍事的・儀式的要素（militärische und rituelle Elemente）に貫かれる。精神的・音楽的活動を伴った旗行進，演劇的活動，講演，作業共同体，合唱・演劇活動。それらは，指導者原理を目指した小さな民族共同体とナチズムへの情念的共感の体得を目指したものである。ペーター・ドデックはこれを「強制共同体演出の決定的装置」（das entscheidende Instrument zur Inszenierung der Zwangsgemeinschaft）と述べる。
- 統合ラガーの起源はすでに1933年以前に遡る。それらの根は，ワンダーフォーゲルの形式である。これらには教育的な意味もあった。それらの目標は，民族共同体（Volksgemeinschaft）である。
- 生活形式宣言。ナチス後簇生（そうせい）。1920年代型回帰。たちまちラガーは普遍的な意味をもつようになった。その形態は多様――農村奉仕（Landjahr），学童疎開，**民族政治科実習（Nationalpolitische Lehrgänge）**，**ヒトラーユーゲント**，ナチス少女団――。全教育を貫く。
- 100以上の統合ラガー名称あり。まことに多様。内容的ごちゃまぜあり。機能――教育的，国家的役割もつ。元は成人教育向け。その後職業人のナチ化促進に援用。→ ラガー：最重要の教育へ。

２．研究状況並びに考察方法（S. 297–298）

- 研究は緒に就いたばかりである。

の中央教育研究所の知られざる後史が，このたびクラースによって新しい視座の元に解明されたと言ってよい。Vgl. Kraas, Andreas: Lehrerlager 1932–1945: politische Funktion und pädagogische Gestaltung. Bad Heilbrunn: J. Klinkhardt, 2004.

5　Vgl. Andreas Kraas: „Den deutschen Menschen in seinen inneren Lebensbezirken ergreifen – Das Lager als Erziehungsform, 2011.“ In: Klaus-Peter Horn/Jörg-W. Link (Hrsg.): Erziehungsverhältnisse im Nationalsozialismus. Bad Heilbrunn: Klinkhardt, 2011, S. 294–318.

①特に新機関については体系研究少なし。例：農村奉仕，学童疎開，帝国労働奉仕，さらにまたそれ以外のラガー形式について，それらの機能，教育的･方法的形式，実態，かつまた類型，共通性と違い，ニュアンスについて確かめた研究はない。**配備ラガー（Einsatzlager）**と**教育ラガー（Schulungslager）**の違いは区別されている。だが教育ラガーも，身体・精神教育への要求，余暇編成を伴った教育形式であり，これらに照らせばこれらはナチス統合ラガー（Integrationslager）の支配形態たるものでもある［≒配備ラガー］。

②しかし区別は不十分である。一部の著者研究者は，ナチス的ラガーシステムの間の区別に注目する。しかし今後の研究においては，ラガーの目標，役割，形態，実践並びにそれの効果についてさらに究明されなくてはならない。

③ナチス統合ラガー（Integrationslager）についての研究の大部分が，組織の歴史研究に偏っている。教育形態，実践，現実などは十分研究されなかった。

客観的状況の研究はされるが，参加者の主観的，並びに積極的な回想体験などについての研究は，今後その教育形態と関わって究明されるべきであろう。

④ナチス統合ラガー（Integrationslager）のシステマティックな研究はごく例外的である。

⑤本研究の重点

（1）最も広い意味で教育的ラガーを扱う。

（2）中でも支配的な教育ラガー，よく研究された**教員ラガー（Lehrerlager）**を重点にする。

（3）ナチス教育ラガーの目標と自己理解［3］，具体的政治的自己理解［3-1］，それらの教育学［3-2］，組織的方法的構造［3-3］。またこれらがラガー実践，ラガー体験［主観的］にどう反映されたか［5］，を区別して扱う。

⑥さらに，ナチスの重要なラガー教育諸組織にも言及する［4］。

3．ナチス教育ラガーの目標と自己理解（S. 298-305）

（1）ラガーの政治的自己理解

1935年，**ホルフェルダー**（Albert Holfelder：のちの教育省局長【ボイムラー腹心――小峰】）は，ナチス下の教育・教育学価値の変遷を述べる。→ 国の位置

ナチス教育学の変遷

- 個人の教養（individualistische Bildung）→ 協同体教育（Gemeinschaftserziehung）
- 理解（Verstand）よりも意思，感情（Willen, Gefühl）
- 自由主義的陶冶材（liberalistisches Bildungsgut）→ 民族的陶冶材（völkisches Bildungsgut）

↓

- 個人，教育者，国家との緊張関係 ⇒ これからは国家の利益のため。（Holfelder: Ende,

1935, S. 10.）

●実践の優位

●ラガー教育――ヒトラーとナチ党（NSDAP）に定式化された政治目的の遂行
それは個人を知性，情念から行動に導き，定式原理を自己のモチベーション
と参加にまで至らしめるもの

●それは体得（Ergreifen）し，実体験（erleben）するものである。

（２）ラガー教育学

• このラガーの自己理解達成＝教育的に行なわれる。ナチス文献でラガーは政治的に述べられるのみ。ベンツェ（Rudolf Benze：ナチス教育の推進者。中央教育研究所長――小峰）はこれの教育学的側面を，1943年に，ベルリン中央教育研究所回顧に寄せてこう述べた；

- …身体（Körper）・性格（Charakter）・精神（Geist）は等価。
- ラガーでは互いは同志。教育的。制服着用。互いを「君」（Du）呼ばわりする。「共同体＝民族共同体」→ ラガー → ナチス。

（Benze, Erziehung, 1943.）

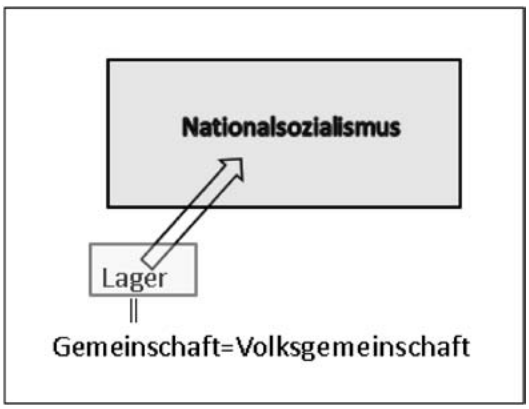


図１．ラガーとナチズム（小峰図）

• 方法原理：体験教育
協同体への服従＝教授。
例外を除去する。体験教育。（Wolff, Lager, 1935.）

•「僕」から「我々」に。教育作業なし　⇔　世界観。体験の上に育成。

• だが，ナチス世界観，その内容物は語られない。

（3）ラガーの組織的方法的構造

1920年代教育学 → ラガー教育。共同体体験へ。

●ラガーの日課一例（晩秋）

6:30	起床
6:45－ 7:15	森のジョギング，早朝スポーツ
7:15－ 8:30	整理整頓
8:30	旗掲揚
8:40－ 9:00	朝食
9:10－10:30	講演「土地と環境」
10:30－11:30	体操，スポーツ，遊び
12:00	昼食
2:00－ 4:00	戸外散策「古代の人間と自然」
4:00	コーヒータイム
5:00－ 6:00	講演「人種的基礎に基づく歴史」
6:00－ 6:45	歌唱
7:00	夕食
7:45－ 8:30	夕・夜の自然探索
8:30－ 9:00	自由交流
9:00	夕べの歌
10:00	消灯

表1．ラガーの日課一例（晩秋）（Kraas, S. 302-303.）

特徴

①身体，肉体活動＝中心要素。早朝スポーツ，国防スポーツ・ゲレンデスポーツ＋作業・労働奉仕

②「教育活動」内実＝ほとんどが講演とグループ学習（Arbeitsgemeinschaft）で2時間までナチス的教育＞専門的・実践的内容。

「国家社会主義」（ナチズム）が形式と内容を貫く。

理由

- ラガー教育＝政治的教育，世界観的教育。
- 「祝典・余暇造形（Fest- und Freizeitgestaltung）」のラガー。
- それは2方面のラガー形姿となる。

A．祝祭要素（Feierelemente）――ラガー生活を儀式化（Ritualisierung），美学化（Ästhetisierung）へと導く。

B．余暇活動（Freizeitaktivitäten）――殆どが共同でとりくむ夕べ造形［夕べづくり］（Abendgestaltung）を念頭におく。

A．祝祭要素（Feierelemente）

• 朝晩の旗の掲揚，降下。音楽，シュプレヒコール唱和。• ナチス記念日祝う。→ シンボル的：共同体服従。

B．余暇活動（Freizeitaktivitäten）

「祝典・余暇造形（Fest- und Freizeitgestaltung）」：ラガー教育の重要要素[6]。

‖

• **同志の夕べ**（Kameradschaftsabend ＝協同体育成）。近所の祭りへ繰り出し，先史時代遠足，日曜散策，行進（ラガーの通常生活とは対照的）

①参加者：ラガーに一体化　②ナチズム協同体化。管理化とは異なる。

C．ラガー指導（Lagerführung）

臣従学校＝直接教育である。

目から目へ。体験と協同体を通じて。

教化環境（pädagogische Atmosphäre）を創出。教育方法：24時間教育。非日常ラガー＝非日常「体験」

• 体験，協同体 → ナチズム（キー概念である）

4．ラガー教育の諸機関（S. 305–309）

ラガーの効果的教育に，組織的教育学的態勢不可欠。ラガーに明確な目標設定するのは次の３つの機関――党，国，非国家的機関である。

ただ，第三の「非国立」のものであるが，例えば**「教員ラガー」**（Lehrerlager）は，［党，国，半国家型あり。すなわち］　①党所管「ナチス教員連盟」運営のもの，②教育省と下部省庁所管で国機関たるもの，③半国家的機関たる中央教育研究所所管のもの，である。

• 三種の機関が，ラガーの名前・組織・ラガー教育に影響及ぼす。しかし競合，確執あり。

（１）ナチ党

• ナチ党（NSDAP）→ 全ドイツ人をナチズムに不断に結合。その方策２つ。

①全ドイツ人を各種組織に掌握　→　年齢，職業，機能をナチズムに定位。

6　**「余暇造形」（Freizeitgestaltung: 余暇設計；余暇づくり）**――「ラガー休日」の取り組みもラガーの重要要素であった。例えば先史時代遠足（vorgeschichtliche Exkursion）や精神病院訪問（Besuch einer „Irrenanstalt“）が実施されたが，「先史時代」はナチス歴史観の重視するところであり，「劣等なる精神病者」を収容する精神病院訪問の後には「遺伝学の必然性」を再認識するという，いずれもナチスイデオロギーの実地検証とでもいった性質のものだった。他に日曜散策，博物館見学，またモーターボート走，単なる「行進」もあった。Vgl. Kraas: Lehrerlager 1932–1945, S. 136.

②この形態内 → 成員の教化（Schulung） a．教育 b．行動変容

↓

• ナチス世界観教育 • ナチズムの心情的確信 • 教育＝選抜

• 出動可能力への錬成

→3主要形態。 A．総統代理 B．ローゼンベルク機関 C．帝国機構指導部

コンフリクト，権力闘争あり

A．総統代理――はじめルドルフ・ヘス指導。のちマルチン・ボルマン。純粋コントロール中心。1936独自ラガー設置（トゥルチング，バート・テルツ，フェルダヒング）

B．ローゼンベルク機関――新聞へ影響力。権限は無し。

C．帝国機構指導部（Reichsorganisationsleitung：ROL）：最重要当局。

1941から，祝祭，教育が重要テーマ。ロベルト・ライ（Robert Rei）――帝国，ガウ，軍，地域グループの教錬指導。ネットワーク化。「帝国教育城エルヴィッテ Erwitte－47 ガウ教育城－89郡教育城」のネットワーク形成。ガウ・郡教育城――党の短期教育機能。⇔オルデンブルク城：長期的教育。

• 職業団体の教育を指導。中でも**ナチス教員連盟**（Nationalsozialistischer Lehrerverein: NSLB）―― 1,300のラガーに合計350,000人教員の再教育（1943年の解体まで）。

（2）ラガー教育の国家的諸制度

●最重要組織――**帝国教育省**（1934. 5 から始動。1935. 1. 1 までに建物統合）

●1933年からラガー教育に熱心取り組み。①学校田園寮 ②人種科教員ラガー ③農村奉仕（Landjahr, 1934）

• プロイセン諸州――この後様々なラガー教育取り組み

• ライン州：中等学校生への**民族政治科実習**（Nationalpolitische Lehrgänge）

• **教員再教育ラガー**（Lagerschulung der Lehrer）

‖

これらは，1936には党機関との確執後，中止ないし党移管。

• 他方農村奉仕は教育省（REM）で整備，法制化。

• 教育省（REM）は，教員ラガーを，1943年の**ナチス教員連盟**解体後も独自のやり方で貫く。

●ほかに司法省ラガー――ラガー宿泊６週間。このため1933. 6 ユーターボークに**教育ラガー「ハンス・ケルル」**（Schulungslager „Hans Kerrl“）を設立。

●ほかにも国の最高当局――「労働奉仕」と「青少年指導」。とくに後者は，

- **ヒトラーユーゲント**（Hitlerjugend：HJ）
- ドイツ幼年団（Deutsches Jungvolk）
- ドイツ女子同盟（Bund Deutscher Mädel：BDM）
- 少女団（Jungmädel）

の各団体に応じてラガー設立。（資料参照）

●他に，学童疎開は，ヒトラーユーゲント（Hitlerjugend：HJ）とナチス厚生団（NS-Volkswohrfahrt），NSLB（ナチス教員連盟）との連携で実施さる。

（３）中央教育研究所（Das Zentralinstitut für Erziehung und Unterricht zu Berlin）

- 中央研＝20世紀前半の最重要の教育機関の一つ。1915, 行政と実践とを繋ぐものとして設立，1945までそれは変わらず。財団立ながら，国の諸機関と協力，人的関係もゆたか。

●1933から――ラガー教育学の発展に寄与。

①第１回農村奉仕準備任される――プロイセン教育省から

②教員ラガー主導――主務機関として。教員の政治教育・知識継続教育を結合。

●1936から――教育省より，個々の科目のナチス的継続教育も任される。

５．ナチスラガー実践とラガー体験（S. 309–312）

- 困難

①典拠なし――ナチスのラガー実践・ラガー体験の日常反映の典拠なし。→ ラガー教育学・ラガー教育の効果を確かめられず。

②内容多様――グループ多様（若者・成人，女子・男子，ナチ確信者・懐疑者）
規模も多層（20–30人の参加者から数千人の規模まで）

③ニーズ多様，具体物 → 効果の研究難しい。

●効果研究をめぐって

①教員ラガー――困難

組織，財政，教員不足。戦争開始で形骸化。１–２回のみの参加。また権限めぐり国と党との対立。

「成功」――成功体験・成功部分＝参加者の教化，反対者の排除（＝入口制限＝踏み絵）

②参加者の受け止め――宣伝と現実とのズレあり。例：学童疎開――HJ と教員団との対立多し。また，「同志の夕べ」（Kameradschaft）――アルコール漬けあり。「行進」（Ausmärsche）――カフェ繰り出し，など。

- 受け止めにプラス評価・マイナス評価あり

③ラガーの教育実践

- 規則（コルセット） vs. 好印象（人的部分）
- グループでの支え合い，安全実感――高評価
  これがない場合――マイナス評価
- 同志・連帯の「実感」――積極的

⇓

「小さな民族共同体」実感

- 効果――祝祭，旗，祭典

6．まとめ（S. 312–313）

- 内面も含めてナチス人間化 → 非日常，例外状況――体験。共同体。直接性。作業活動を通して。良き思い出。兵営に似る。グループ。集団生活。同志意識。「ナチス体験」。
- 客観条件 → 主体的に感ずる

［付録］ ラガー諸形式一覧（S. 314–317）

以下に掲げたものは，最重要のラガー形式，また多様なナチス統合ラガーの一覧である。・・・これらは機能，目標，内部構成，担い手等々多岐にわたる。体系的な研究に至ってはおらず，ラガー形態をシステマティックに解明したとは言えない。

1．若者，生徒のためのラガー

A．教育ラガー（VDM，そしてヒトラーユーゲントの）
余暇ラガー／休日ラガー（VDM，そしてヒトラーユーゲントの）
天幕ラガー／高地ラガー／原野ラガー／夏季ラガー（VDM，そしてヒトラーユーゲントの）

B．出動ラガー／収穫ラガー／農業奉仕ラガー／農村奉仕ラガー
東部地域におけるゲルマン人ラガー

C．ドイツ・イギリス青年ラガー

D．文化政策活動ラガー

（１）生徒のための協同体ラガー

- 協同体ラガー／民族政治科実習（Nationalpolitische Lehrgänge für Schüler）
- 学童疎開ラガー

（２）学校エリートのための選抜ラガー

（帝国）ナチス後継者育成教育ラガー

（帝国）指導者ラガー，ヒトラーユーゲント指導者用ガウ／帝国音楽教育ラガー

- 外国ヒトラーユーゲントの「祖国ラガー」（„Deutschland-Lager“）
- 民族政治教育舎（Nationalpolitische Erziehungsanstalt：Napola ナポラ）夏季ラガー

入植青年ラガー

徴兵検査ラガー／国防ラガー／（帝国）選抜ラガー，例えば教員養成所（Lehrerbildungsanstalten：LBA）選抜，ないしはアドルフヒトラー校選抜における

（３）例えばヒトラーユーゲントないし親衛隊における国防ラガー／防衛力育成ラガー／防衛スポーツラガー

青少年教育ラガー

青少年福祉ラガー

モリンゲンとウッカーマルクトにおける青少年保護ラガー（事実上の強制収容所）

２．大学生のためのラガー

例えば教員大学（HfL）準備ラガー

教員養成所（LBA：Lehrerbildungsanstalt(en)）または教員養成大学（HfL：Hochschule für Lehrerbildung）のテントラガー／ヨット帆走ラガー／国防スポーツラガー／同胞ラガー／教育ラガー

例えばゲッティンゲン近郊リトマルスハウゼンにおける諸大学教育ラガー

男女体操大学生のための散策ラガー（Wanderlager）

試験ラガー（Prüfungslager）

- 帝国音楽ラガー／帝国大学生指導部学術活動ラガー

ユーターボークにおける法学者協同ラガー

ランゲマルク特進コース（Langemarck-Studium［小峰訳］）選抜ラガー

- 独仏「学生スキーラガー」／国際学生ラガー

3．青年労働者／徒弟ラガー

職業準備ラガー／青年労働者・徒弟のための準備教育ラガー

職業教育ラガー

職業者（帝国）選抜ラガー（帝国職業コンクールの後身）

フォルクスワーゲン工場徒弟のための選抜／再教育ラガー

4．個々の（職業）グループラガー

帝国労働奉仕団（男女）ラガー

農業奉仕ならびに女子労働奉仕の場における再教育ラガー

労働奉仕準備のための教育ラガー／特別ラガー

帝国アウトバーンラガー

救護見習生のための実習ラガー

社会福祉非受給者のための副業ラガー

従軍戦傷者ラガー

国内森林労働教育ラガー

- 「チューリンゲン国立指導者政治学院」（Thüringen Staatsschule für Führertum und Politik）教育ラガー
- 帝国パイロット学校（Reichsfliegerschule）のパイロットラガー
- 身体障害者発達障害者のためのヒトラーユーゲント教育ラガー
- 修学前ラガー
- 帝国選抜ラガー
- 建築労働者協同ラガー
- ドイツ帝国郵便ラガー
- アルト・レーゼ（Alt Rehse）のドイツ医師団指導者学校教育ラガー
- ドイツ農業者団教育ラガー
- ライプチヒのドイツ帝国書籍業者教育学校実習

5．ナチ党ラガー，ナチ党諸機関・党連携諸機関のラガー

出版部ラガー

大学私講師ラガー

郡／ガウ／帝国ナチ党幹部政治指導者教育ラガー

突撃隊（SA）学校および突撃隊（SA）メンバーラガー

ナチス婦人団メンバーラガー

- ナチ党外交官ラガー
- NSV（ナチス厚生団 Nationalsozialistische Volkswohlfahrt：NSV）メンバーラガー
- DAF（ドイツ労働戦線 Deutsche Arbeitsfront：DAF）メンバーラガー
- クラウスタール－ツェラーフェルト（Clausthal-Zellerfeld：ニーダーザクセン）の親衛隊（SS）指導者学校ラガー

６．教員ラガー

若手教員－研究ラガー

国防ラガー／ゲレンデスポーツラガー

レクリエーション・ラガー／「教員再教育」（Umschulung der Lehrerschaft）ラガー

夏期教育ラガー／秋ラガー／テントラガー／協同ラガー

登山教育ラガー／臨海教育ラガー／スキーラガー

「退職教員」教育ラガー

「戦傷教員・身体障害教員」教育ラガー

NSLB（ナチス教員連盟）の郡／ガウ／帝国教育ラガー

ナチス教員連盟専門家（帝国）ラガー（例えば国民学校／中等学校）

個別教員グループ教育ラガー（例えば若手教員ラガー／職業学校教員ラガー）

学校監督，校長教育ラガー

学校の教科別の教育ラガー（例えばドイツ語／英語／ラテン語／歴史／生物／地理）

ナチス教員連盟各専門分野別（帝国）教育ラガー（例えば小型カメラ写真／体育教育／ドイツ科／民族性教育学／模型飛行機操）

重点テーマ教育ラガー（例えば地政学／先史時代／民俗学／系譜学（Sippenkunde）／人種学／「東方建設」／音学／素人芝居／歌唱／自然保護，植物生態学，動物生態学／民族性芸術教育／女子教育諸原則

留学ラガー

国境地方ラガー

（帝国）文化ラガー

国外教員のための祖国ラガー（Deutschlandlager）

留学教員・留学大学生ラガー

ドイツ・ブルガリア教育者協同ラガー

非ドイツ人教員のための教育ラガー／再教育ラガー（例えばアルザス人教員／オランダ人教員／ルクセンブルク人教員／チェコ人教員／民族ドイツ人教員（volksdeutsche Lehrer），バルトドイツ人教員）

三，結　　語

以上がクラースによる「ラガー教育」研究の大要である。

私は，この研究によって，ナチス第三帝国時代に「教育ラガー」・「訓練ラガー」が学校のみならず多くの国民，諸団体に網の目のように配置され，ここへの参加と教育訓練を通して人々が民族共同体に有機的に，かつ「自覚的」・「心情的」に結びつけられて行ったことを知らされた。ラガーは，「個人」を＜民族共同体＞に強固に緊縛する統合化装置だったのである。

1．対象者，領域

ナチス「教育ラガー」・「訓練ラガー」は，青少年対象のものにとどまらず，①大学教員を含む教員ラガー，②国家エリートの医者・医療関係者，司法関係者対象のラガー，③文化・スポーツ・芸術・国際交流関係者対象のラガー，そして　④ナチ党関係者自体を対象とするラガー，と世代別，領域別に，そしてこれらが層的に多様に配備されていた（そこには「退職教員」教育ラガー，「戦傷教員・身体障害教員」教育ラガーなども編成され，すでに＜社会＞の第一線を退いた人々，あるいは社会福祉の対象者である人々も「漏れなく」組織されていたのである）。

ラガーの代表的なものが，本論でも触れられている**「教員ラガー」**（Lehrerlager）である。それは，かつてのプロイセンの代表的教育研究所であった**「中央教育研究所」**（Zentralinstitut für Erziehung und Unterricht）を主務機関として，全ドイツの教員に「ナチス教育学」を宿泊講習，実地実習を通して教化した。**「ナチス教員連盟」**（Nationalsozialistischer Lehrerbund: NSLB）の主導で，全国に1,300のラガーを展開，これに参加して「ナチス教育学」の再教育を受けたものは350,000名に上る（1943年の連盟解体までに）[7]。これらの教員が，全ドイツの学校現場でナチズム教育を普及し，国民教化の実動部隊となったのである[8]。

> 人種学深化の医学ラガー，ベルリンの北方メクレンブルク＝フォアポンメルン州アルト・レーゼの，**「ドイツ医師指導者学校アルト・レーゼ」**»Führerschule der Deutschen Ärzteschaft Alt Rehse« は1935年開設。人種学・人種衛生学・優生学・断種・安楽死の研究実践を主内容とする訓練ラガーで，ナチス第三帝国の中心的医学教育ラガーだった。（http://www.ebb-alt-rehse.de/files/geschichte.htm 参照）
>
> また，**「司法省教育ラガー »ハンス・ケルル«」**（Schulungslager „Hans Kerrl“）は，ナチス帝国教会大臣ハンス・ケルルの名を冠した法務教育ラガー（1933. 6 設立）。ベルリン南方ブランデンブルク州ユーターボーク在。1933–1939の間に，裁判官候補生ら 2 万名余がナチズム法

7　Vgl. Kraas: „Den deutschen Menschen…“, S. 308.

8　Vgl. Kraas: Lehrerlager 1932–1945. ここには教員ラガーの展開が詳細に記されている。中央教育研究所およびナチス教員連盟によって実施された教員ラガー一覧参照。Vgl. a. a. O., S. 339–355.

学研修を展開したのである。

（参考：Folker Schmerbach：Das „Gemeinschaftslager Hanns Kerrl“ für Referendare in Jüterbog 1933-1939. (http://web.uni-frankfurt.de/fb01/imprs/)）

（ちなみに，ユーターボークにほど近いブランデンブルク州ツォッセンには，かつてワイマール時代にベルリン市立学校田園寮（Schullandheim）「《ベルリン若者村》ツォッセン」（„Berliner Jugendland“ Zossen）が存在した。これは私には，若者の心と体の全体的発展をめざすベルリン新教育の象徴的な事例として記憶されている[9]。）

２．知性否定，身体・祝祭中心のラガー生活

ラガーは都会を離れた田園の孤立空間に設置された。そこではヒトラーユーゲント・突撃隊の指導下に，「非日常」の生活共同体が形成され，疑似軍隊生活が展開される[10]。

「肉体訓練は自己改造の必須条件だった。大学教師たちの不満は，スポーツ訓練重視で，学業の時間がほとんど残らないことだった」。（コッホ『ヒトラー・ユーゲント』，p. 133.）

大学教師の教育ラガー（同所）

ラガーのカリキュラムは，身体訓練と，行事（特にこれの祝祭的造形，意義づけ）が中心である。知識・学問の深化は少なく（それも，ナチスイデオロギー注入の「講演」が中心をなす），多くの時間が身体訓練と，行事（これの一面的「聖化」）に当てられた。「朝晩の旗の掲揚，降納。音楽，シュプレヒコール唱和」，「ナチス記念日」の祝典。これらを通して「共同体服従」に至るのがラガーだった。まさに**「祝祭要素（Feierelemente）…［が］，ラガー生活の儀式化（Ritualisierung），美学化（Ästhetisierung）へ導く」**のであった[11]。

9　小峰『ベルリン新教育の研究』，第９章参照。

10　H. W. コッホ・根本政信訳『ヒトラーユーゲント：戦場に狩り出された少年たち』サンケイ出版，1981.（Koch, H. W.: Hitler Youth: The Duped Generation. Ballantine Books, NY, 1972. 参照。）

11　Vgl. A. a. O., S. 304.
「祝祭要素（Feierelemente）…［が］，ラガー生活の儀式化（Ritualisierung），美学化（Ästhetisierung）へ導く」――組織された教化環境（pädagogische Atmosphäre）はこの空間を神聖化させ，ナチズムを身体化させた。私はこの指摘から，戦前わが国の祝日大祭日儀式を思い浮かべるのである。戦前の学校において挙行された祝日大祭日儀式もまた厳粛な「宗教的雰囲気」の下で挙行された。紀元節，天長節，

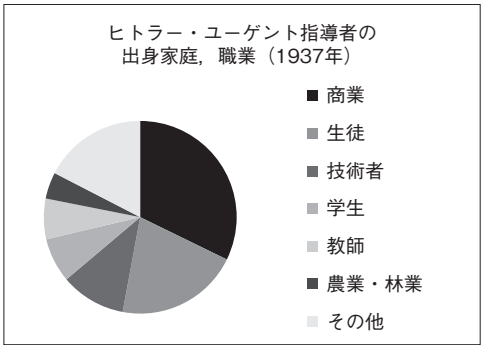
上掲コッホのヒトラーユーゲント研究からは，学問から遠ざけられ肉体訓練に明け暮れるラガーを一部の大学教員は耐えがたいたと受け止めていたことが分かる。山本尤は，1935年ツオッセンで大学教授資格申請者に行われた第１回「共同キャンプ」の様子をこう描いている。

「権限は突撃隊の大学局とドイツ大学教官団体の体育振興局とが握り，キャンプ責任者は，突撃隊の上級指導者，かつては失業中のなめし革工で，ナチの街頭闘争時代からの古参党員W・グルンディヒが勤めている。すでに博士号を持っている少壮の学者たちの指導をこうした無教養のナチ党員が行うということの異常さもさることながら，参加者たちの苦痛は大変なものだったろう」[12]。

ヒトラーユーゲント団員，同団指導者の出身家庭は，コッホによれば次の通りであった[13]。

表２．ヒトラー・ユーゲント指導者の出身家庭，職業（1937）
（コッホ『ヒトラーユーゲント』，p. 112.　グラフ化はいずれも小峰。）

分類	割合（%）
商業	25.5
生徒	16.4
技術者	8.7
学生	5.9
教師	5.4
農業・林業	3.5
その他	13.8
［計］	79.2



元始祭，神嘗祭および新嘗祭に，学校の教員生徒一同は講堂に集合して御真影（天皇，皇后写真）へ最敬礼。これに続いて万歳奉祝，校長の教育勅語奉読・訓話，儀式の最後は時宜にかなった唱歌合唱。これらが一糸乱れず，厳かに執り行われたのである。最高度の緊張の中，式典の柱をなすのが「教育勅語」奉読。校長は勅語を恭しく取り出し，定められた荘厳な朗詠声調に基づいて勅語の一語一語を読み上げ，やがて最後の一節「朕爾臣民ト倶ニ拳々服膺シテ咸其徳ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ　明治二十三年十月三十日　御名御璽」に言い及ぶ。この一連の「祭儀」と荘厳厳粛な雰囲気によって，子どもたちは「天皇制」を身体化，情念化したと言える。（佐藤秀夫：「わが国小学校における祝日大祭日儀式の形成過程」『教育学研究』第30巻第３号，1963年，参照。）この儀式への服従と畏怖を当時の生徒は回想する。

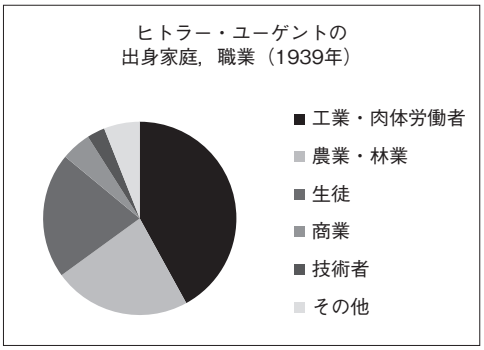
「小学校の儀式で教育勅語が読まれるときは，本当にシーンと静まりかえったね。ところがそこで，ポケットからでかいビー玉を落としたやつがいた。講堂中にその音が響きわたったけど，誰も笑わなかった。そいつが後でどんな目に合うか，想像しただけで顔がひきつって固まっちゃったんだよ」と。（山中恒「必要なのは自分を愛すること」『朝日新聞』，2017年６月28日夕刊）

12　山本尤『ナチズムと大学：国家権力と学問の自由』中公新書，1985，p. 160.

13　コッホ『ヒトラーユーゲント』p. 112.　なお，ヒトラーユーゲント団員の出身家庭の総計が100％となっていない（79.2％）。記入漏れかどうか，理由は不明である。その後原著を取り寄せて確認したが，割合合計は原著も79.2％であった。また，榎本政信訳本は表１．と表２．のタイトルが入れ替わっていたので原著に基づきタイトルを正した。

表３．ヒトラー・ユーゲントの出身家庭，職業（1939）（コッホ，p. 112）

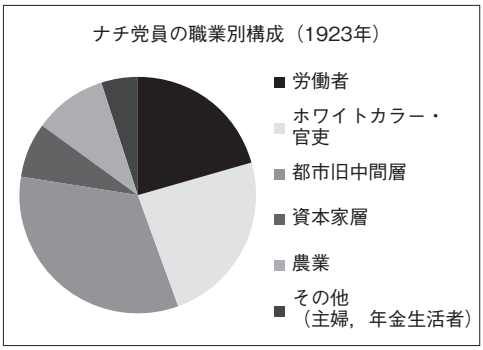
分類	割合（%）
工業・肉体労働者	42
農業・林業	23
生徒	21
商業	5
技術者	3
その他	6
［計］	100

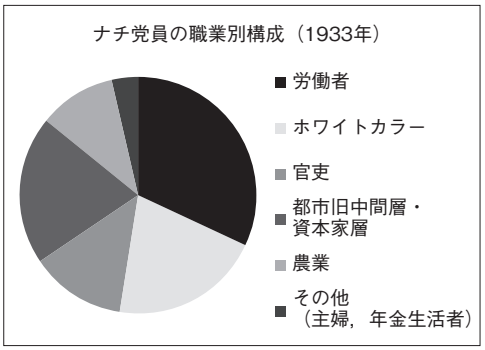


次に，ナチス国家を支えたナチ党（NASDAP）党員の出自は，山口定によれば次の通りである（1923/33年）[14]。

表４．ナチ党員の職業別構成の変遷（山口定『ナチ・エリート』p. 47.）

	率（%）		率（%）	
層＼年	1923.11		1933	
労働者	21.3		32.1	
ホワイトカラー	*		20.6	
官吏	*	2者計　24.6	13	
都市旧中間層	34.2		*	
資本家層	7.8		*	2者計　20.2
農業	10.4		10.7	
その他（主婦，年金生活者）	4.9		3.4	
［計］	100		100	



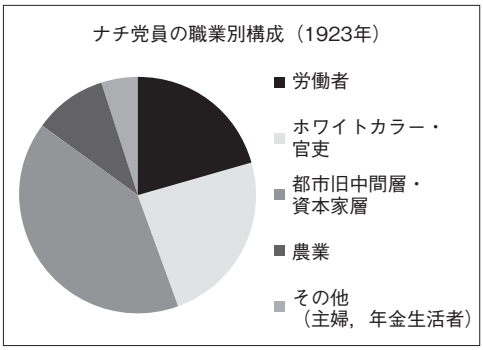


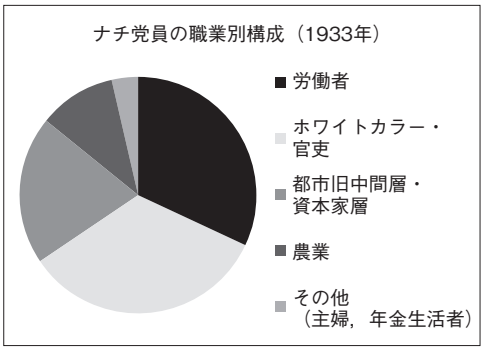
14　山口定『ナチ・エリート：第三帝国の権力構造』中公新書，1976，p. 47.

表５．［加工］ナチ党員の職業別構成の変遷（山口定，同所）

	率（%）
層＼年	1923.11
労働者	21.3
ホワイトカラー・官吏	24.6
都市旧中間層・資本家層	42.0
農業	10.4
その他（主婦，年金生活者）	4.9
［計］	100

	率（%）
層＼年	1933
労働者	32.1
ホワイトカラー・官吏	33.6
都市旧中間層・資本家層	20.2
農業	10.7
その他（主婦，年金生活者）	3.4
［計］	100





• 表５は，表４を加工（小峰）して職業分類を同一にしたものである。

ナチ・エリート分析で山口は，党・行政方面のエリートは，その出身家庭が軍人か官吏，ホワイトカラーで，高学歴･都市出身の者が多いが，他方，「暴力装置の管理者」エリートは，これとは性質を大きく異にしていたと言う。

> 「…それに対して，暴力装置の管理者になった人々は，世代的には前二者よりもかなり若く，社会的出身も，下層労働者や農民など明らかに前二者よりも低い階層から出て，しかも青春期に，父親がいない（彼らの三分の一）とか，貧困（同じく三分の一）とか，恐慌による打撃など深刻な体験をしている。教育水準も低く宗教心も明確でない。イデオロギーにおいては，注目すべきことには，反ユダヤ主義がそれほどなく「ヒトラー崇拝」がもっとも多い。いいかえれば，彼らにおいては，イデオロギーの信奉自体がそもそも明確でなく，「ヒトラー崇拝」を除けば，あとはむしろ « 闘争 » そのものの自己目的化ならびに「同志的連帯へのあこがれ」と「運動との一体感」が目立つ」と[15]。

このような管理者の指導するラガーでは，知性・芸術・理性の位置づけは低く，それらへの対抗文化としての体錬や祝祭要素がより一層支配的であったと言える。

15　同書，p. 256.

だが，知性や学問・合理性の対極にある情念や体錬，祝祭・「神話」がラガーを支配したのは，これら個人的要素にではなく，本質的には「ラガー」を貫く思想と組織論にあることを見落としてはならない。フォンドゥングは，ナチズムの「祝祭」は，太陽・火（＝ゲルマン人）と暗黒（＝悪と死）との対立（＝二元論的世界像）がナチズムによって克服されることを象徴する；そのため「祭祀」プログラムは基本的に三部から構成され，これは形式的にはキリスト教典礼の「模倣」である――としている。ナチス祝祭は，「火と血」，「宇宙論的太陽神話」を継受するナチスが，混乱の現世を救済するというナチス「神話」の具象化であったが，それを演出する形式は，人びとに親しまれたキリスト教典礼――ナチスが否定するところの――に求められたのだった[16]。

かかるラガーを，人びとは今までの社会とは異なる「親密な空間」と高く位置づけ，彼らはここでナチズムを「体得」して行ったのである[17]。

３．小民族共同体から大民族共同体へ。心情の共同体

ラガーにおいては，起居を共にしラガー活動に邁進する中で形成される＜同志的結合＞，心情の一体性が重視された。

ラガーという小民族共同体は，＜ドイツ民族＞・＜ナチス第三帝国＞という大民族共同体に有機的に拡大･結合してゆく基本単位である。ラガーで育成される労働能力（職能形成）と，ラガー生活から導かれる＜心情の一体性＞は，大民族共同体にとり車の両輪をなしていた。

帝政時代の末期から始まる青年運動，ワンダーフォーゲル運動，田園回帰運動はいずれも，このような情念の共同体めざした運動であった。それが，ドイツの第一次世界大戦敗北後，ワイマール時代のドイツ民族主義運動，失地回復運動と一体化してナチス時代に引き継ぎ・増幅されて，ナチス「生存圏」建設へと連なって行く。国民をこのナチスイデオロギーに心情的に一体化させ，これに主体的に投企させる「教育ラガー」･「訓練ラガー」は，ファシズムへの組織化・国民動員の装置として機能したのである[18]。

「教育ラガー」･「訓練ラガー」をナチズムの人間形成全体の中に位置づけたクラースの研究の意義はまことに大きく，今後，多くの分野の＜ラガー教育＞究明に道を開いたと言えるであろう。

---

16 フォンドゥング，池田昭訳『ナチズムと祝祭：国家社会主義のイデオロギー的祭儀と政治的宗教』未來社，1988，第５章，参照。

17 それは日本の軍隊と軍隊生活（「内務班」）を想起させる。吉田裕は，日本の軍隊が民衆に支持されたのは「平等」と「能力主義」のゆえであるという。軍隊では社会的地位や家柄，学歴でなく兵士としての能力，とくに戦闘能力たる体力と精神能力で進級が決まる。軍隊はまた個性や人格の独立性を否定し，軍紀という鋳型の中に人間を一元化する。この「服従と平等性が組み合わされた」軍隊は，とりわけ農村や貧しい社会層出身の者には愛着されるものであって，軍隊生活は苦しさよりも「楽しさ」，「郷愁」を抱かせる場所なのであった。これはナチスラガーと通底すると言える。（吉田裕『日本の軍隊：兵士たちの近代史』岩波新書，2002，参照）

四，文　献

1．Böhme, Günther: Das Zentralinstitut für Erziehung und Unterricht und seine Leiter: Zur Pädagogik zwischen Kaiserreich und Nationalsozialismus. Neuburgweier: G. Schindele, 1971.
2．Kraas, Andreas: „Den deutschen Menschen in seinen inneren Lebensbezirken ergreifen － Das Lager als Erziehungsform, 2011.“ In: Klaus-Peter Horn/Jörg-W. Link (Hrsg.): Erziehungsverhältnisse im Nationalsozialismus. Bad Heilbrunn: Klinkhardt, 2011, S. 294-318.
3．――――: Lehrerlager 1932-1945: politische Funktion und pädagogische Gestaltung. Bad Heilbrunn: J. Klinkhardt, 2004.
4．Scholtz, Harald: Erziehung und Unterricht unterm Hakenkreuz. (Kleine Vandenhoeck-Reihe, 1512), Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1985.
5．H. W. コッホ・根本政信訳『ヒトラーユーゲント：戦場に狩り出された少年たち』サンケイ出版，1981．（Koch, H. W.: Hitler Youth: The Duped Generation. Ballantine Books, NY, 1972.）
6．小峰総一郎「ライン地方のあるギムナジウム（3）」『中京大学国際教養学部論叢』第8巻第1号，2015/9.
7．――――『ベルリン新教育の研究』風間書房，2002.
8．佐藤秀夫：「わが国小学校にお ける祝日大祭日儀式の形成過程」『教育学研究』第30巻第3号，1963.
9．寺崎昌男；戦時下教育研究会編『総力戦体制と教育：皇国民「錬成」の理念と実践』東京大学出版会，1987.
10．フォンドゥング，池田昭訳『ナチズムと祝祭：国家社会主義のイデオロギー的祭儀と政治的宗教』未來社，1988.
11．山口定『ナチ・エリート：第三帝国の権力構造』中公新書，1976.
12．山中恒「必要なのは自分を愛すること」『朝日新聞』，2017年6月28日夕刊.
13．山本尤『ナチズムと大学：国家権力と学問の自由』中公新書，1985.
14．吉田裕『日本の軍隊：兵士たちの近代史』岩波新書，2002.

URL
1．Das „Gemeinschaftslager Hanns Kerrl“
http://web.uni-frankfurt.de/fb01/imprs/（最終閲覧：2017/6/24）
2．»Führerschule der Deutschen Ärzteschaft Alt Rehse«
http://www.ebb-alt-rehse.de/files/geschichte.htm（最終閲覧：2017/6/17）

（2017. 6. 29）

18　ちなみに，わが国の総力戦体制下の教育を究明した共同研究『総力戦体制と教育:皇国民「錬成」』（東大出版，1987）は，その原型を「道場型錬成」に求める。それは，①日常生活から遮断された特定の施設（道場）で行われている，②宗教的行事や身体活動，農耕作業など心身一体の行的活動が重視され，反知性主義，精神主義に裏付けられた実践至上主義である，③個人の修養というより，師弟一体となった宿泊生活の中での集団的修養がめざされている，④青年や成人が主たる対象であり，一種の人格改造機能をもつ，⑤前提として皇室中心主義が貫かれている，を特徴とするとしている（同書，29ページ）。教師の再教育（2泊3日ほどの「錬成講習会」）や地域・職場・学校での「錬成」体制なども究明されており，ナチス・ラガー教育と重なる部分を見出せる。「錬成」とドイツとの関係については，明治中期（1885〈明治18〉年）に陸軍大学教官ドイツ人少将メッケルの軍制改革建議が「練成」（「錬成」でなく）の語を使ったとあり（同書，33ページ），また1939〈昭和14〉年にはヒトラー・ユーゲントに倣う青少年団体一元化構想（「学徒隊構想」＝勅令団体，のち流産）があったとする（同書，202ページ）。第二次世界大戦下の日本の教育に，「同盟国」ドイツの影響は大きいと思われる。ナチス・ドイツ教育との比較があってもよかったであろう。